

## 江吏部集試注（十一）

木戸，裕子  
鹿児島県立短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/8973>

---

出版情報：文献探究. 41, pp.24-32, 2003-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

## 江吏部集試注 (十一)

木戸裕子

(承前)、(十)は『人文』第二十六号に掲載している。

### 凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内) 山口県立図書館本―(山)

陽明文庫本―(陽) 祐徳稲荷本―(祐)

静嘉堂文庫本―(静) 神宮文庫本―(神)

国会図書館本―(国) 無窮会図書館本―(無)

東大図書館(E45 656)本―(東A)

東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B)

岡山大図書館本―(岡) 島原松平文庫本―(島)

東北大図書館本―(東北) 京大図書館本―(京)

多和文庫本―(多)

賀茂別雷文庫本―(賀)

名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藂 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※前稿の補遺及び訂正

北山円正氏から御教示をいただきました。心よりお礼申し上げ、補遺・訂正としてあげさせていただきます。

二十九 七言冬日登天台即事応員外藤納言教言

六行目本文及び訓読 開霧則見青顔 霧を開けば則ち青顔を見る

十二行目訓読 青天に倚りて鳥纒かに通ふが如きに至りては

十四行目訓読 土に任せて廊廟の材を貢する者也

二十四行目訓読 誠に以有るかな

三十一行目訓読 宜しく詩を以て仏事を作すべしと

三十六行目訓読 若し記録せずは洛に人無しと謂はれんと云ふこと

爾り

詩七句目訓読 常に冠を掛けんと欲するも母に縁りて滞り

詩十一句目訓読 偶たま遇ふ雲を攀づる龍管の駕

◎開霧則見青顔 晋の衛瓘が楽広を評した語、「此人之水鏡也。見

之瑩然若披雲霧觀青天」〔世説新語〕賞誉『蒙求』三七〇「彦輔

氷清」『芸文類聚』「霧」をふまえた表現。したがって、底本の

青顔のままとする。

◎譏漢武之求神仙 漢の武帝が海の彼方に神仙を求めたことについ

ては、『白氏文集』二二八「海漫々」に「人伝中有三神山 山上多

生不死藥 服之羽化為天仙 秦皇漢武信此語 方士年年采藥去」と

ある。

◎鶴勒 〔分聲牙而施鶴勒 便是公家之恩〕〔本朝文集〕卷四十一 供

養延曆寺中堂願文 高階成忠

◎馬鳴 〔寢興思馬鳴 俯仰謁龍樹〕〔凌雲集〕「謁海上人韻勒 遇

樹住澗句孺務霧芋聚賦趣 仲雄王

※本稿では巻上三十番から三十三番までの詩を取り扱う。

三十 春遊原上〔粟田障子作十五首中其四〕

相尋勝境賞風流

寄意韶光原上遊

白鹿旧名伝得遠

黄鸝新語聴来幽

行留草色煙侵跡

醉倚花枝雪點頭

莫道歛娛春有限

從茲計会契千秋

勝境を相尋ね 風流を賞で

意を韶光に寄せ 原上に遊ぶ

白鹿の旧名 伝得へて遠く

黄鸝の新語 聴来きて幽かなり

行きて草色に留めらるれば 煙跡を侵し

酔ひて花枝に倚れば 雪頭に点ず

道ふことな 歛娛の春に限り有りと

茲より計会して千秋を契らん

【校異】

1, 粟―栗〔ミセケチシテ粟ト傍書〕(東A)―栗(賀、鶴) 2,

作―ナシ(陽、京、山、祐、賀、鶴) 3, 原上遊―遊原上(京)

4, 鸝―鶴(鶴) 5, 新―訴〔ミセケチシテ新ト傍書〕(東A)

6, 道―導(内、島、多) 7, 計―斗(内、島、多)

【押韻】

○○××××○下平声尤韻

×××××××

○○×××××

×××××××

××○○○×× 下平声尤韻(侯幽同用)

○○○×○○○ 下平声幽韻

××○○○×× 下平声侯韻

○○××××○ 下平声尤韻

【製作年次】

詩題割注の粟田障子作とは、藤原道兼の粟田山荘の調度として作られた障子に賦された詩歌のこと。『栄花物語』の記事の時間配列にしたがえば、粟田障子詩と和歌は正暦元年頃の作。「かやうの事につけても、大納言どのはいとやらやましう女君のおはせぬ事をおぼさるべし。粟田といふ所にいみじうをかしき殿をえもいはず仕立て、そこに通はせ給て、御障子の絵には名ある所々をかゝせ給ひて、さべき人／＼に哥よませ給」『栄花物語』卷三「さま／＼のよろこび」粟田障子作については熊本守雄「粟田障子詩絵と和歌と漢詩」『恵慶集 校本と研究』、木戸「大江匡衡 粟田障子十五連作」『文献探究』二十七号、二十九号）同「粟田障子詩考」『語文研究』第七十三号）を参照のこと。「又被申云、粟田障子詩輔正卿撰之。坤元録詩維時卿。然則作者与判者各互有長短。随其功也。粟田障子以言以帥殿方人不被入之。怨言云、雖坤元録絶句一首者何不罷入哉云々。故文章博士実範後伝聞此事、不被許此書云々」〔類聚本『江談抄』卷五詩事〕

【語釈】

◎春遊原上＝本詩中には何処の原なのかの記述はないが、前述の熊本守雄氏『粟田障子詩絵と和歌と漢詩』によれば、『恵慶集』一八八「春みかきがはらにはなみる人あり おもふ人こさせまほしきところかなみかきはらのはなのさかりは」が粟田障子和歌として、本詩に対応するという。熊本氏の言われるように、和歌に

「はなのさかり」、詩に「酔倚花枝」とあることから、どちらも同じく桜の花の咲き乱れる場面を詠んだと考えられる。したがって、本詩にいう原は大和国の歌枕「御垣原」であろうと推測される。「ふるさと春めきにけりみよしのみかきがはらをかすみこめたり」『詞花和歌集』卷一「三平兼盛」のごとく、かすみと共に詠まれることも多かった。なお、『白氏文集』に「秋遊原上」の題を持つ五言古詩があるが、本詩と内容的にも用語の上でも関係はないようである。

◎勝境＝景勝の地。「仁風膏雨去随輪 勝境歛遊到逐身」『白氏文集』二七八七「送劉郎中赴任蘇州」此間勝境雖無主 漸々聞來欲有妨」『菅家文章』卷四「遊覽偶吟」

◎風流＝山水などの景色の雅な美しさ。「山水從來無擔去 願馮君得写風流」『菅家文章』卷一「寄巨勢先生乞画図」退翫風流於郊扉 鶴帳友月」『江吏部集』卷上「七言五月五日陪左相府池亭同賦雲峯入夏池応教一首」

◎韶光＝春の光、景色「閑地心俱静 韶光眼共明」『白氏文集』六六六「早春独遊曲江」若使韶光知我心 今宵旅宿在詩家」『菅家文章』卷五「送春」『和漢朗詠集』卷上「三月尽」に所収）

◎白鹿旧名＝白鹿は白鹿原のこと。霸水のほとり、驪山の西にある。白居易も何度かこの地に遊んでいる。「独尋秋景城東去 白鹿原頭信馬行」『白氏文集』六二二「白東閑遊」宴迴過御陌 行歌入僧房 白鹿原東脚 青龍寺北廊 望春花景暖 避暑竹風涼」『白氏文集』八〇七「渭村退居。寄礼部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」

◎黄鵬新語黄鵬はうぐいす。「翅低白雁飛仍重 舌洪黄鵬語未成」  
『白氏文集』一〇二七「南湖早春」『千載佳句』四時部「早春」  
所収新語は鳴き始めたばかりの声。

◎草色草の色。「霞光照後殷於火 草色晴来嫩似烟」『白氏文集』  
三一〇九「早春、憶蘇州寄夢得」『和漢朗詠集』卷上「霞」に「霞  
光曙後……」として所収鶯声誘引来花下 草色拘留坐水辺  
『白氏文集』「春江」(一一五九「千載佳句」)「春遊」『和漢朗詠  
集』卷上「鶯」所収

◎煙もや、かすみ。

◎酔倚酔って寄りかかる。この句「倚松根摩腰 千年之翠滿手  
折梅花插頭 二月之雪落衣」『和漢朗詠集』卷上「春夜」尊敬  
による。

◎莫道言うな。言ってくれるな。「莫道老株芳意少 逢春猶勝不逢  
春」『白氏文集』一三九三「題州北路傍老柳樹」

◎飲娛飲節物今如此 願奉宸遊億萬年。『全唐詩』卷七十一  
「奉和春日幸望春宮應制」劉憲

◎計会会うことを計る。計画して会うようにする。「今日不知誰  
計会 春風春水一時來」『白氏文集』二八七四「府西池」『千載  
佳句』『和漢朗詠集』上卷「立春」に所収南薰風与南枝色 計  
会一時不弁香。『新撰朗詠集』上卷「梅」時綱

### 【通釈】

春 野原に遊ぶ

景勝の地を求め自然の美を愛でる

春の光に惹かれて野原に遊ぶ

白樂天たちが白鹿原に遊んだのは遠い昔のことだが

(今我らの遊ぶこの原では)鶯の初音がかすかに聞こえてくる

野原を歩き若草の色をめめて立ち止まれば春がすみは来た道を  
隠し

酔って花盛りの枝に寄りかかれば花びらは頭上に雪と降りかか  
る

この飲ばしい春に限りがあるとは言わないでほしい(言う必要は  
ない)

今日から千載の後までもこの春の楽しみを共にすることを約そう

### 【参考】

粟田障子詩は匡衡の他に幾人かの詩人の作品が残っている。本詩  
と同じ詩題を持つものとしては、

藤原為時 春遊原上(『御所本和漢兼作集』五〇 別本和漢兼  
作集四七六)

煙霞不記誰今主 楊柳猶傳是故城  
がある。

七言律詩の頷聯か頸聯であろう。匡衡の詩にも「煙侵跡」とあり、  
絵には霞がかかった春景色が描かれていたものと推測される。

三十一 春日野行(同作中其一)

郊外雪銷春採菜 郊外の雪銷えて春菜を採る

行人願望日將曛 行人願望すれば日將に曛れんとす

此時想得和羹事 此の時想ひ得たり和羹の事

誰問当初傳野雲 誰か問はん当初傳野の雲を

【校異】

銷一消（京） 傳一傳（陽、東A、島、京、神、無） 傳 傳（ミ、セケチシテ傳ト傍書）（内）

【押韻】

○××○××× ×××○××× ○××○××○ ○××○××× 上平声文韻  
×○×××○× ○××○××× 上平声文韻

【語釈】

◎春日野行 春日野は大和国の歌枕。若菜摘みを詠むことが多く、本詩中にも詠まれる。ただし、本詩題の場合、「しゅんじつやこ」と音読みし、「春日野に行く」という意味と「春の日に野に行く」の二重の意味を持たせた掛詞的な表現となっている。↓松浦友久『万葉集という名の双関語』（大修館書店 一九九五年）。前述の熊本氏によれば、本詩は『惠慶集』一八五「ある所の御屏風の哥 かすが野にわかなつむ女あり かすが野のものもりもいかがおもふらんおいわかになつみにきたるを」に対応する。

◎郊外 町はずれ。都の外。「郊外綠楊陰 江中沙嶼明」〔全唐詩〕

卷三五五「晚歩揚子遊南唐望沙尾」劉禹錫

◎行人 旅人「明月本無心 行人自回首」〔白氏文集〕「宿藍溪對月」

◎願望 振り返り見る。「東願望漢京 南山雲霧裏」〔全唐詩〕卷八三「贈趙六貞固二首」陳子昂「行旅之人 經歷數日 乃過其下」

去之願望 猶在山下」〔本朝文粹〕卷二二「富士山記」都良香  
◎曛 暗くなる。黄昏れる。「独上樂遊園 四望天日曛」〔白氏文集〕二六「登樂遊園望」

◎和羹 新春子の日の風物である若菜の羹を作ること。「和菜羹而啜口期 氣味之克調也」〔菅家文章〕「扈從雲林院、不勝感歎聊叙所觀」〔本朝文粹〕卷九、「和漢朗詠集」上卷「子日」にも所収。また、羹を作る時にうまく味のバランスを取るように、名宰相が政治をうまく補佐すること。書經說命篇の殷の高宗と傳説の故事による。「若作和羹、爾惟塩梅。爾交修予、罔予棄」〔書經〕說命下「朕昔為握符之尊 卿亦為和羹之佐」〔本朝文粹〕卷一四「宇多院為河原左大臣没後修諷誦文」紀在昌

◎当初 何郎独在無恩沢 不似当初傳粉時」〔全唐詩〕卷三六〇「題于家公主舊宅」劉禹錫

◎傳野雲 殷の高宗が夢で告げられたすぐれた補佐役を捜し求めたところ、傳巖の原野（傳野）で傳説を見いだした故事をいう。「夢帝賚予弼。其代予言。乃審厥象、俾以形旁求天下。說築傳巖之野、惟肖。爰立作相、王置諸其左右」〔書經〕說命上

【通釈】

春日野を行く  
郊外の雪が消えたので 春の若菜を摘む  
旅人は振り返ると 折しも日が沈もうとしているところ  
この時、和羹の故事を思い出した  
誰があのとときの殷の高宗のように 傳野に賢人を求めたりするだらうか

(その必要はない、傳説にも勝る道兼さまがいらつしやるのだから)

【備考】

本詩は粟田障子詩の第一首めにあたる。粟田障子は『栄花物語』によれば藤原道兼が后がねとなるはずの女子の為にあつらえた調度だが、匡衡の詩は姫君の為というよりも、本詩のように政治家としての道兼を讃える内容のものが多。

三十二 嗟峨野秋望〔同作中其九〕

何処秋情不可涯	何れの処にか秋情涯ぎるべからざる
嗟峨野曠近京華	嗟峨野 曠く京華に近し
影疎堤畔蕭条柳	影 疎かなり 堤畔 蕭条の柳
香乱藜間爛熳花	香 乱る 藜間 爛熳たる花
遥漢風高聞雁櫓	遥漢 風高くして雁櫓を聞き
遠村雲断見人家	遠村 雲断えて人家を見る
興余軒騎忘帰路	興余りて軒騎 帰路を忘る
不奈山西日已斜	奈んともせず山の西 日に斜めなるを

【校異】

野曠―曠野〔一作野曠ト傍書〕(底本、内・陽・東A・B・島・京・山・祐・神・無ニヨリ改ム)―野曠〔二作曠野ト傍書〕(静) 間―開〔ミセケチシテ間ト傍書〕(内A) 熳 漫(内A・島) 村―樹(底本、諸本ニヨリ改ム) 見―旦(京・山・祐・神) 忘

帰路―路〔路ノ上ニ忘帰ト補入〕(内A)

【押韻】

○×○○○×○	○××××○○	下平声麻韻
×○○×○○×	○×○○××◎	下平声麻韻
○×○○○○×	×○○××○○	下平声麻韻
○○○××○×	○×○○××◎	下平声麻韻

【語釈】

◎嗟峨野 山城国の歌枕。秋草の名所として有名であった。「野は嗟峨野さらなり」(『枕草子』)。「野は」(『野山のなかにはいづれかおもしろき』)なかよりそうす。「ちかき程にはさが野、かすが野……」(『うつほ物語』)。「吹上の下」前述の熊本氏によれば本詩に対応する障子和歌は『惠慶集』一九三「秋さが野に花みる人あり はなみつくれなば野べにやどりせんよのまはむしのこゑもきくべき」である。

◎何処 〔「何処」で始まる詩は白居易とその周囲の詩人の作品に多い。本詩の書き出しもそれらに倣ったもの。「何処風光最可憐 妓堂階下砌台前」(『白氏文集』七四一「宴集皓大夫光福宅」)「何処春深好」(『白氏文集』二六五三〜二六七二「和春深二十首」) 秋情 秋の風情

◎涯 〔「涯キハキハマルカキル」(『観智院本類聚名義抄』) 曠 〔ひろい。「莫不籍野而曠其遊 登山以遠其望」(『本朝文粹』卷十一「九日侍宴觀賜群臣菊花」紀長谷雄) 京華 〔繁華な都。「緑糸文布素輕 珍重京華手自封」(『白氏文集』

一〇二一「元九以緑糸布白輕、見寄製成衣服以詩報知」

◎疎ニ「ウトシ」ウトホナリ オロンカナリ」《觀智院本類聚名義抄》

◎堤畔ニ堤のほとり。ここは大井川河畔。「濛濛堤畔柳含煙 疑是陽

和二月天」《全唐詩》卷七五二「柳枝辭十二首 其の六」徐鉉

◎蕭条ニ草木が枯れ萎んでもの寂しい様子。「前頭更有蕭条物 老菊

哀蘭三兩叢」《白氏文集》三三八四「杪秋独夜」選詞人之綺

靡 惜気序之蕭条」《江吏部集》卷下「暮秋陪左相府書閣 同賦寒

花為客栽」《本朝文粹》卷十一にも所収

◎爛熳ニ花の咲き乱れるさま。爛漫に同じ。「色鮮妍 香芬馥 雜蕊

爛漫 咲旧契於銑溪之園」《本朝文粹》卷十「紅桜花下作」大江

朝綱

◎遙漢ニ漢は天の川。「昨夜銀河畔 星文犯遙漢」《全唐詩》卷八十

三「酬李參軍崇嗣旅館見贈」陳子昂「ただし、ここは「雁櫓」と

の縁で天を「漢」と言い、遙かな天の高みを指すか。櫓と天の川

の組み合わせには「わが上に露ぞおくなる天の川とわたる舟のか

いのしづくか」《古今和歌集》雑上八六三）がある。

◎雁櫓ニ雁が空を渡るときの鳴き声。船をこぐ櫓の音に似ているこ

とから言う。「晴虹橋影出 秋雁櫓声来」《白氏文集》二四九五「河

亭晴望」《遥聴雁櫓過 空任蛛網懸」《江吏部集》卷中「述懷古

調詩一百韻」

◎軒騎ニ車と馬。乗物。またその乗客。「其始軒騎聚門 綺羅照地」

《本朝文粹》卷一「奉同源澄才子河原院賦」源順

◎日已斜ニ「行至菊花潭 村西日已斜」《全唐詩》卷一六一「尋菊

花潭主人不遇」孟浩然「なお、白居易「和春深二十首」の内、

九首が「日光斜」とする。残り十六首も第八句の韻字は「斜」で  
ある。

### 【通釈】

嵯峨野の秋景色

どこで限りなく秋の風情を感じることができらるろう

それは広大で都にも近い嵯峨野であろう

大井河畔の柳はまばらな葉を残すのみで寒々とした影を落として

いるが

草むらにはかぐわしい秋の草花が爛漫と咲き誇る

秋風の吹く遙か空の彼方では 雁が鳴き渡り

雲が風に吹き払われると 遠くの村の人家が姿を現す

物見の人々が帰るのも忘れるほどの秋景色のすばらしさだが

日が西の山に傾いていくのはどうしようもない

### 【参考】

和漢兼作集六二七（別本和漢兼作集 四七七）

嵯峨野秋望 藤原為時

林梢雁陣穿秋霧 山脚人家帶夕陽

これも七言律詩の頷聯か頸聯と思われる。雁、霧（雲）、人家と、  
匡衡の作品の頸聯とほぼ同じ情景を詠んでいる。

三十三 林下晚眺（同作中其十一）

趣幽訪勝意依依 幽をもと趣め勝を訪ねて意依々たり



晩望興深惜落輝 晩望興深くして落輝を惜しむ  
林下由来風月地 林下は由来風月の地  
同遊過此欲何帰 同遊此に過ぎり何れに帰らんとす

【校異】

中一ナシ(京) 趣一赴(山・祐・神) 深一除(ミセケチシテ深  
ト傍書)(内A) 輝一暉(内A・京) 一耀(神) 何帰一帰(帰  
ノ上ニ何ト補入)(陽)

【押韻】

×○○×××○<sup>上平声微韻</sup> ××○○×××○  
○○○○○○×× ○○○××○○ 上平声微韻

【語釈】

◎林下Ⅱ林の中。本詩も具体的な名所の名は記さないが、前述の熊  
本氏によれば、『惠慶集』一三六「十月ばかりにたびゆく人のも  
みぢしたる木のもとにやどりしたるを 行すゑはもみぢのもとに  
やどとらじおしむにたびの日かずへぬべし」、同一三九「もみぢ  
によぶこどりのいたるかたあり山みちゆく人あり もみぢみてか  
へらんこともおぼえぬによぶこどりさへなくやまぢ哉」、同一九  
五「こごゐのもりにもみぢみる人あり 人のおやの思ふこころや  
いかならんこごゐのもりのあきの夕ぐれ」の三首と、一三六番歌  
と多少の異同があるが『拾遺抄』秋「二条右大臣の栗田の山庄の  
障子のゑにたび人の紅葉ある所にやどりたるかたある所に 惠慶  
法師 いまよりはもみぢのもとにやどからじをしむに旅のひかず

へぬべし」が本詩に対応する和歌であり、伊豆の歌枕である子恋  
の森を描いた障子であったという。たしかに一三六番歌の「おし  
むにたびの日かずへぬべし」、一三九番歌の「かへらんこともお  
ぼえぬに」は本詩の結句に相当する。ただし、惠慶集一九五番歌  
が栗田障子和歌であるかどうかは、やや疑問が残る。

◎晩眺Ⅱ暮れ方の眺め。「山河宜晩眺 雲霧待君開」(『全唐詩』卷二  
○○「西亭送蔣侍御還京」岑參)

◎依々Ⅱ慕わしい気持ち。「未及彈与酌 相对已依依」(『白詩文集』  
三〇一〇「对琴酒」)

◎晩望Ⅱ晩眺に同じ。

◎落輝Ⅱ落日。「浦樹懸秋影 江雲燒落輝」(『全唐詩』卷三「岳州別

趙国公王十一 据入朝」張説)

◎由来Ⅱもとより。二元(来)モトヨリ 由(来)同(『観智院本

類聚名義抄』「由来事過多堪惜 何況蘇州勝汝州」(『白氏文集』

二六三七「重答汝州李六使君見和憶吳中旧遊五首」「由来感恩在

秋天 多被當時節物華」(『和漢朗詠集』上卷「秋興」島田忠臣)

◎風月地Ⅱ「風月」の語については二「八月十五夜江州野亭对月言

志」の「風月之名」の語釈参照のこと。この林が「国々の名ある

所」すなわち歌枕であることをいう。

【通釈】

林の晩景

静閑の地を求め 景勝を訪ねれば 慕わしさがつのる  
暮れ方の眺めは 趣深く 落日を惜しむ

この林のものは昔からの詩文を作るにふさわしい土地

ここを訪れた我々一同 いったい何処へ帰ろうというのか  
(この地に留まっていようではないか)

(きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授)